

「基本的帰属錯誤へのチャレンジ—状況の力と『心と文化』研究の課題」

村本由紀子  
(東京大学)

社会心理学の領域でよく知られる古典的な心理概念のひとつに「基本的帰属錯誤 (Fundamental Attribution Error)」がある (Ross, 1977)。これは、他者の行動の原因を推測する際に、その行為者の性格や能力などの内的な属性を過度に重視し、行為者を巻き込む状況や環境要因を見逃しやすい傾向を意味する。人は誰しもこの「錯誤」に陥りやすいという。が、実は、伝統的な心理学の理論それ自体も、認知・動機・感情といった「個人内の心的過程」に着目するあまり、社会環境の要因を軽視してきたのではないかと、との指摘がしばしばなされている。

古くは 1970 年代初め、アメリカ人社会心理学者の Zimbardo が、自ら主導した大がかりな模擬刑務所実験の結果を踏まえて「状況の力 (Power of Situation)」の重要性を訴え、社会的な現象の原因を当事者の個人特性に求めようとする当時の風潮に警鐘を鳴らした。とはいえ、その後も多くの心理学理論では認知主体としての個人に焦点が当てられ、社会環境は認知主体に一方向的に影響を与える要因として扱われるにとどまっていた。1990 年代以降、比較文化的視点をもつ心理学の研究が盛んになると、数々の国際比較実験・調査を通じて「異なる文化に生きる人々は互いに異なる心理・行動傾向を有する」との知見が蓄積され、多くの研究者たちが、マイクロな個人 (の心) とマクロな文化・社会環境との「相互構成的」な関係を視野に入れた新たな理論枠組みの構築を目指すようになった (Bruner, 1990; Markus & Kitayama, 1991; 山岸, 1998 など)。

これらの試みは、具体的にどのようなかたちでなされ、どこまで成果を挙げたといえるのだろうか。また、近年飛躍的に発展しつつある文化神経科学などの学際領域は、これらの試みに対していかなる示唆を与え得る存在なのだろうか。こうした観点から、今回の話題提供では、「心と文化」をテーマとする近年の研究事例を紹介しながら、社会心理学における自らの基本的帰属錯誤へのチャレンジの動向と、そのことに関わるいくつかの問題について考えてみたい。